

## 本の向こうに見えてくるもの：ラテンアメリカ文学の愉しみ

日時：2022年6月7日より毎週火曜日（全5回）18:00~19:00

参加方法：Zoomによるオンライン形式

後援：京都ラテンアメリカ文化協会

※事前申し込み制・参加費無料

ラテンアメリカ世界に足を踏み入れた者は、日本とのあまりの違いに驚き、またそれが故に強烈なその魅力の虜になってしまう。今回の教養講座では、ラテンアメリカ世界が生んだ「文学」に焦点を当て、これに魅せられた研究者にその想いを熱く語っていただく。近年ラテンアメリカ文学作品の翻訳や研究書が多く書店に並ぶようになっているのは、やはりそれがこれまで慣れ親しんできた文学とは趣を異にし、そこが面白く、また学ぶところが多いからに違いない。なぜラテンアメリカ文学に魅せられたのか、なぜそれほど面白いのか、そして手に取った本の向こうに何が見えてくるのだろうか、そして何より日本にいる私たちにとって、それは何を意味しているのだろうか。単に翻訳された作品を手にしただけでは分からない、しかしとても大切なそのような私たちの問いかけを、講師の先生方にご自身の体験と研究をもとにお話しいただき、ラテンアメリカ文学に親しむきっかけになればと思うのである。

第1回 6月7日（火）

### 「フアン・ルルフォの現代性」

仁平ふくみ（京都産業大学外国語学部ヨーロッパ言語学科准教授）

フアン・ルルフォの『燃える平原』（1953）と『ペドロ・パラモ』（1955）は発表当時からメキシコで注目を集めました。作品を参照しながらその理由をいくつか紹介・考察します。これを踏まえつつ、ルルフォ作品の語り方やテーマ設定（暴力・移民・記憶等）は現代にも通じるものであることを探っていきます。

第2回 6月14日（火）

### 「アルゼンチン文学という『伝統』」

内田兆史（明治大学経済学部准教授）

一般に幻想性がその大きな特徴とされているラプラタ文学、とくにアルゼンチンの文学の特異性について、ボルヘス、コルタサルら代表的な作家の作品に言及しつつ、「人工的」というキーワードを軸にその背景を探ります。

第3回 6月21日（火）

### 「ドラウジオ・ヴァレーラが描くノンフィクションの世界」

伊藤秋仁（京都外国語大学外国語学部ブラジルポルトガル語学科教授）

ドラウジオ・ヴァレーラの描いた『カランヂル駅』はブラジルにおいて大ベストセラーになりました。犯罪者と一括りにされる囚人たちにも個性があり、人生があることを明らかにしたからです。本講演では同書の内容の紹介と囚人たちの声の向こう側にある社会の真実を探ります。

第4回 6月28日（火）

### 「ラテンアメリカ先住民文学ルネサンス」

吉田栄人（東北大学大学院国際文化研究科准教授）

1980年代頃から活発化した先住民の復権運動の中で先住民作家による文学作品が多数生まれてきています。地域や民族は様々ですが、この一連の文学作品の登場は先住民文学ルネサンスとも呼ばれています。この新しい先住民文学はラテンアメリカ全体の文学の中でどのような意味を持つものなのかを考えてみましょう。

第5回 7月5日（火）

### 「ラテンアメリカ文学で語られる多彩なジェンダーの風景」

洲崎圭子（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特別研究員）

ラテンアメリカの小説には、マチスモ、母性といったジェンダー規範に囚われた人物が多く登場します。男は男らしく、女は女らしくあれと期待された社会の中で、人はどのように自らの存在を立ち上げていくのでしょうか。ジェンダーの観点から文学を読み解きます。

●お問い合わせ●

京都外国語大学ラテンアメリカ研究所

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6

TEL: 075-312-3388 E-mail: ielak@kufs.ac.jp

<https://www.kufs.ac.jp/ielak/index.html>